

## 石川さんの思い出（5）

人文社会学部の自称「看板講義」に社会調査実習がある。あるテーマで1年間かけて社会調査を行い、その成果を報告書にまとめるハードな講義である。

報告書は原則として年度内の3月末までの刊行であるが、石川さんの班は遅れることが多かった。「賞味期限切れは不味い」などと、よく督促したものである。一昨年度2012年度報告書も石川さんの体調不良にもより、なかなか完成しないようで気になっていた。調査実習の過程で「問題」も生じたようで、報告書の完成が急がれた。石川さんが入院してから急ぎよ、石川班9人のメンバーを集めて報告書の完成をめざした。

報告書の原稿はほぼ集まっていたが、重要な箇所欠缺したところがあり、原稿の督促と全体の調整に全力をあげた。入院中の石川さんにも「編集後記」を2日以内に書くよう厳命した。なんとか原稿を集約して印刷に回し、短期間に校正を行った。当時、私は目の手術を控えて調子が悪く、スムーズに編集・校正が進まずイライラしていた。なんとか報告書を完成させてから、私は市大病院に入院した。それで退院直後に、調査に協力してもらったある議員さんに報告書を持参して「事情説明」に行ったわけである。

昨年の経過はここまでにして、石川さんの「編集後記」を紹介しておこう。

調査テーマは「名古屋市会調査2012」であり、2004年の調査に続くものである。調査の内容は報告書を読んでもらいたいが、石川さんは調査の結論として次のように述べている。

「3. 11 後、地域の絆への期待は高まったかに見えた。そして、政治、すなわち多くの人々を巻き込む意思決定に無知・無関心であることのツケがどんなに重いものかも、われわれは思い知ったはずである。そういう意味では、「地方自治は民主主義の学校である」ことの重要性がこれほど迫ってくる時代もそうはあるまい。だが実際には、住民が主体的に考え、それを政策に結びつけるというのはたやすいことではない。そのための方法がどうあるべきか、まだまだ考えなければならないことは多い。」なかなか鋭い指摘である。これをいま読み返してみ、私にとっても重要な問題が提起されていると感じた。

そして最後に、「学生諸君はよくやってくれたが、私自身の体調不良等もあり、指導が十分だったかどうかについては内心忸怩たるものがある。特に、学生諸君の自発性やリーダーシップが、最後までうまく引き出せなかった。ペースメイキングもうまくいかず、作業も遅れ気味だった。指導力不足を猛省している。— 調査にあたっては、今年度もまた、多方面にお世話になった。にもかかわらず、手順に関する確認が十分でなく、ご不快な思いをさせてしまった方もいらっしゃる。指導が至らず、ご迷惑をおかけし、深くお詫び申し上げます。— どうもありがとうございました。」



(2014年8月10日)